

The Topics

第8回定期総会 盛大に

第8回気象予報士会定期総会は、5月17日、東京大学山上会館で開催された。この日は、午前中に記念講演2つ、午後から総会議事、夕刻からは懇親会が開催され、例年のことながらややハードなスケジュール。講演開始前には会場は満席となり、予備の椅子が多数持ち出されるほどの盛況となった。

記念講演、まずは、みずほフィナンシャルテクノロジー社の鮫島隆太郎部長による「天候リスクマネジメントへのアンサンブル予報への活用について」。気象庁の依頼を受けての調査結果が披露され、気象予報士の新たな活躍の場が広がっていくことが具体的に示された。続いて、気象庁数値予報課の斉藤和雄氏による「気象庁における非静力学モデルの開発状況について」。このモデルは、氏が気象研究所時代から手塩に掛けて育て上げてきたもの。3年後には運用が開始される運びであり、計算機資源の制約でその性能が十分に発揮できないのは残念だが、ガイダンス資料なども含め、予報精度の向上がおおいに期待される。(講演概要は別刷り「記念講演要旨」のとおり。鮫島氏の調査結果の細部は、気象庁ホームページに掲載されている。

(URL:<http://www.jma.go.jp>)

午後の部。総会冒頭、石井和子会長は、「気象予報士会は会員数1,800人を超える大所帯となった。社会にどのように気象予報士が係わっていくかについては気象予報士制度が始まって以来の課題だが、2年間に亘り『気象予報士会の今後を考える委員会』を組織し、可能性を検討してもらった。その答申を得て、今年度は、今までにない新たな出発ができるよう計画した。ただし、会員一人ひとりの自覚が必要。会には様々な会員がいるが、その多様な能力をプラスの方向に発揮して頂きたい。」と挨拶。また、同会長から嬉しいニュースとして、木村龍治前会長が気象予報士会会長と

～かつてない盛況ぶり～

しての永年の功績などを認められ、「藤原賞」(日本気象学会)を受賞したことが披露された。

来賓挨拶に立った気象庁産業気象課の大島課長補佐は、気象予報士が民間気象会社のみならず、様々な分野に広がりを見せている一方で予報許可事業者が漸増している現状を紹介。また、気象庁として防災に力を入れるなど改善を図っていること、3カ月予報にもアンサンブル予報を導入するとともに、その予報業務許可の準備を進めていることなどを明らかにした。気象予報士会に対しては、会員にとって有為な気象庁情報を積極的に流すことを約束する一方、気象科学館への協力に謝辞を述べ、地方においても様々な協力関係が生まれることを期待したい、気象予報士個人個人は高い技術を有する厳しい目を持った気象庁サポーターであ

って欲しい、と会及び会員への期待を表明した。

総会議事は、渡辺保之(東京)議長、小泉正明(東京)副議長によって整齊と進められ、全議案ともほぼ満場一致で可決された(総会出席者157名、委任状775名)。今年度の最大の特徴は、向こう5カ年を見通した「中期事業構想案」を策定したこと。これにより、将来の方向性が見えてき



議案採決時の総会会場

た。副会長には久保田効氏(元気象大学校長)が選出され、幹事も前年度の8名から定員の12名が勢揃いして、「再生気象予報士会」を運営することとなった。なお、小倉義光先生の寄付金を基金として新たに始まる会員表彰制度は、ご本人の前で、拍手喝采の中「小倉賞」と命名された。

懇親会は、小倉先生の乾杯の音頭で和やかに幕開け。懇親会にだけ参加の御仁もいたとか。会場はたちまちにして大社交場と化し、おおいに盛り上がった。

第9回定期総会は、平成16年5月15日(土)に東京大学山上会館で開催の予定。 幹事 白石晶二

移動幹事会 新潟で開催される

去る6月28日、気象予報士会新潟支部（新潟県気象予報士会）の設立総会に併せ、移動幹事会が新潟市内で開催された。当初、この移動幹事会は昨年度（今年3月）開催の予定だったが、下記の理由でこの日に延期された。

新潟県は言わずと知れた雪国である。そのため、冬季は雪対策で多忙になる。もしも3月に移動幹事会を開催すると、新潟支部準備会の方は移動幹事会の準備に加え、雪対策も考えなければならない訳である。地域の気象特性を改めて認識させられた。

さて、前置きが長くなってしまったが、本題に入りたい。当日は遠く京都からの参加者を含め、12名（内幹事5名）という、ややこじんまりした会となったが、自己紹介に始まって今年度の事業計画説明、新しい支部発足に向けて有意義な議論がなされた。

「気象予報技術研究会」「プレゼンテーション技能研究会」などの技術研鑽に関する講習会について説

明があり、参加者達は真剣な面持ちで聞き入っていた。これらの講習会は、今年度は東京で行う予定との説明に対し、新潟支部の会員からは地方支部会員も同様に機会を受けたいとの要望が出された。これについては、講習会をビデオ撮影し、それを各地方支部に配布する案等が考えられている。

続いて、支部として先行している東京支部、関西支部（関西気象予報士会）の会員から、運営に関するアイデアやコツなどを説明された。その中で、幹事や世話人の間での連絡にメーリングリスト（ML）が有効であること、幹事の負担を掛けすぎないようにすることが肝要である、などが確認された。これらは、新潟支部の世話人にとって運営するに当たり力強いものとなったかもしれない。

そして、あっという間に1時間15分の移動幹事会は終了し、新潟支部設立総会、記念講演へと引き継がれた。

地方担当幹事 小川 豪（東京）

新潟支部を設立

諸岡雅美（新潟）

6月28日（土）、新潟にオープンしたばかりのコンベンションセンター「朱鷺メッセ」を会場に、新潟支部の設立総会と記念講演会が行われた。県内の会員と、県外からも大阪や北陸方面から、また総会に先だって行われた移動幹事会に出席した幹事の方々、そして一般の方では県や市の防災担当者など、総勢42名の盛大な会となった。

設立総会に先立ち、まずは気象予報士会の石井和子会長から「これからは地域活動が活躍する時代」とご挨拶をいただいた。その後の総会では、設立趣旨の説明、会則の承認、役員の承認、特別会員の提案などが行われ、すべての案が決議された。

記念講演会に移り、はじめに新潟支部副代表の柳秀氏（日本気象協会 新潟支店）から、「度肝を抜かれた、びっくり体験記」と題し、平成10年8月におきた新潟豪雨の体験を、1メートル以上冠水した自宅付近の道路の写真や当時の天気図などをふまえてお話いただいた。

新潟支部では、気象・雪氷・防災などに貢献している方を特別会員とし、招へいすることとした。次の講演では、この特別会員をお願いした酒井重典氏（前・新潟地方気象台台長）から「アンサンブル予報について」という題で、自らの気象庁での経験とあわせて、アンサンブル予報が導入された経緯やその特徴、実例をご説明いただいた。

最後に、特別会員の新潟大学積雪地域災害研究センターの青山清道教授から記念講演をいただいた。青山教授は積雪期地震や積雪地域災害の研究、酸性雨・酸

性雪の研究を専門に行っており、今回は「積雪地域の災害、積雪期地震と防災対策について」というタイトル。海外での経験も豊富な青山教授から、地球温暖化の影響でネパールの氷河の融解がすすみ、大規模な洪水が起きている実態がスライドで紹介された。また、これまでに起きた積雪地域での地震について、参加者らに覚えているかどうかなどを聞きながら、被害の事例の写真や新聞記事などをスライドとビデオで紹介され、問題点などを指摘した。

新潟支部の会員は27名。今後は施設見学や一般向けのイベントなども行うようにしている。新潟は春・夏・秋・冬のほかに「雪」という季節があり、独自の雪国文化が育まれてきた。この地域の特性を活かし、会員相互に協力しながら、無理のない活動を継続できるようにしていく予定である。今後の活動にもご期待ください。



学 会 シ ン ポ ジ ウ ム

初の学会参加、大成功！

日本気象学会の2003年度春季大会がつくばの国際会議場で開催されたが、5月24日（土）に気象予報士会が中心となって専門分科会を開催した。当日は学会最終日の午後にも拘わらず、会場の定員を超える150名近い参加者があり、学会員の気象業界という実社会に対する関心の高さを伺えるものであった。また、気象予報士会からの参加者も40名を超え、中には名古屋や大阪など遠方の参加者もあった。

プログラムは、座長（平松）が簡単な趣旨説明を行った後、それぞれの分野で気象予報士および気象予報士会の活動の紹介を行った。

板東恭子会員 気象予報士に関する各種統計データを紹介し、その中で、気象予報士数は増加したが必ずしも資格が活用しきれていない現状を述べた。地域密着型の気象情報など、気象情報の利用の促進、予報業務許可事業者となる際の参入障壁の低減、現象の予想だけでなく、企業内・地方自治体内での気象コンサルタントや気象情報の利用のプロを育成し、気象予報士の活用の中にも広げるべきとの意見を述べた。

小西雅子会員 気象予報士制度の日米比較について紹介し、日本の気象予報士は永久資格だが、アメリカの資格は3年毎の更新に改正する動きがあるとの紹介があった。3年毎の更新を資格の価値を高める一方、資格を取得したキャスターは英語圏内各国での活躍の場があると述べた。アメリカでは、これら

の資格を国際的に門戸を広げていく計画を紹介し、日本からは気象予報士資格を学位認定事項として認めてもらえるよう、働きかける必要があると述べた。

永澤義嗣会員 気象庁の気象予報技術を紹介する一方、防災ではこれらの技術だけではまだ不足で、2001年の愛知県豪雨発生時のことを例に引いて、詳細な予測資料に惑わされない実況把握と診断能力、そして現象の説明能力の必要性を訴えた。

松嶋憲昭会員 「地方自治体における防災業務」を紹介し、災害発生後の対応が中心で、災害防止体制はできていない現状を述べ、市町村防災担当者向けの出前研修や相談役として、気象予報士の能力を活かしていただきたいとの期待を述べた。

諫山安彦会員 小中学校向け出前授業「楽しいお天気講座」への取り組みを紹介した。気象予報士が地域と関わる事によって、自立的社会貢献としての新しいフィールドが開拓され、関西気象予報士会はその場の提供を行っている。今後の課題としては、ボランティア活動のため事務局体制が弱い事。また気象予報現場の専門家が少なく、最新予報技術に触れる機会が少ない事。さらに知名度を上げる（ブランド戦略）が挙げられると述べた。

さらに、閉会にあたり石井和子会長が、今回の専門分科会を総括して「気象予報士会としては今後も日本気象学会の中で気象予報士の技術研鑽に努めたい。また従来とは違った視点で、日本気象学会の発展に寄与したい」と述べた。

幹事長 平松信昭

幹事会の体制

気象予報士会改革元年、執行部は総会終了後最初の幹事会で執行部の体制の見直しを図り、新体制を築いた。
新ポストと主要な職務は、以下のとおり。

なお、実員の配置は病気等のトラブルで担当者が不在となることのないよう、正・副ダブル配置する。

幹事長：幹事会における業務処理の指針の提示、各幹事職の職務及び業務処理の調整・役割分担に関すること

総務：会全般に係わる式典・会議の開催運営に伴う事務処理、文書の処理、情報の保全、事務局の運営に関すること

規則：規則類（会則・細則・内規等）の制定・改正・廃止に関すること

会員：会員名簿の作成、会員の入会・退会・処分、会員の個人情報及びその保護、会員の福利に関すること

広報：会報の作成・配布、ホームページ上の記載内容、パンフレットの作成配布に関すること

渉外：会全般としての対外折衝、外部からの苦情処理、外部情報の収集・処理に関すること

企画：事業計画の立案、各種プロジェクト及びイベントの企画立案、審議委員会に対する諮問の実施・運営・答申の処理に関すること

情報システム：電子フォーラムの維持運営、ホームページの設定、維持運営・外部に対する窓口業務に関すること

地方：地方組織の運営関連業務、地方組織の立ち上げ・育成に関すること

会計：予算編成関連業務、予算執行の統制、決算関連業務に関すること

* 法人化問題、ご意見募集 *

気象予報士会法人化に向け、来年度、専門委員会を設置して本格的な検討が始まります。法人化に関しては、その是非を含め、会員の皆さんにはさまざまなご意見があるかと存じます。そこで、まず、法人とはどのようなものなのか、会員の皆さんに知っていただくため、このたび担当幹事が報告をまとめました。

寄せられたご意見を、専門委等に反映させたいと考えています。是非下記HPをご覧ください、忌憚のないご意見をお寄せください。

（URL）<http://kangaerukai.ddo.jp/houjinka/>
（ログイン名）colo （パスワード）yohoujinka

航空機のデータとその利用

質問：八木健太郎(神奈川) 回答：原 基(神奈川)

【質問】200hPa、300hPa面の天気図は飛行機のデータが充実していると聞きますが、飛行機のデータがどの様に送られて、プロット図にどのような記号で記されるのですか？

【回答】気象庁には世界中を飛行している航空機から、風向・風速、気温等の気象観測データが集まってきます。具体的には次のような方法で気象庁に入電しています。

国際線のパイロットから特定のポイントを通過した際に、航空局の管制通信官に対して口頭で報告した観測値が電報形式で送信されてくるもの

地上と飛行機の双方で自動的にデータ交換が行えるシステムを利用して、一定の時間間隔または高度毎に観測値が電報形式で送信されてくるもの

通報数としては一日あたり、は約2,000通、は約13万通(このうち日本上空で約8,000通)入電しています。(図1参照)

特に日本の上空は朝から宵の内の時間帯は国内便が多数飛行しており、の方法による観測データは各空港の下層の詳細な観測値が得られることから、空港上空の実況把握には貴重なデータとなっています。(離着陸時のデータが総数の2/3を占めており、その際は決まった高度毎に1分単位で通報されています。)

ご存知のように、高層観測データは全世界で00UTCと12UTCの一日2回、一斉に行っています。これに対し、観測する場所と時刻に制約がない飛行機の観測データは、高層観測を補完するデータとして極めて重要

であり、上層大気の実況把握や数値予報の客観解析の精度向上に大いに役立っています。

ご質問の200hPa、300hPa面のFAX天気図は、作成するにあたっては飛行機の観測データを客観解析に利用していますが、プロットしているのは地上・船舶の高層観測データのみです。

なお、気象庁の予報現場では、飛行機の観測データを図2のような記号でプロットしています。

【質問】一定の高度で観測をする場合、それは例えば300hPaの等圧面と一致しないと思いますが、それに対する補正は3次元最適内挿法、3次元変分法など使うのでしょうか？

【回答】通報されてくる飛行高度は、観測された気圧をICAO(国際民間航空機関)の定める標準大気を用いて変換した高度なので、数値予報に利用する場合は、再度ICAOの標準大気を用いて気圧に変換します。3次元最適内挿法や3次元変分法といった手法では航空機データに限らず、任意の高度の観測データ(気圧、気温等)を使って数値モデルのモデル面上の解析値を算出することができます。その後、指定気圧面のデータを出力する際には、それらモデル面のデータを鉛直に内挿して、出力しています。

ICAOはInternational Civil Aviation Organizationの略

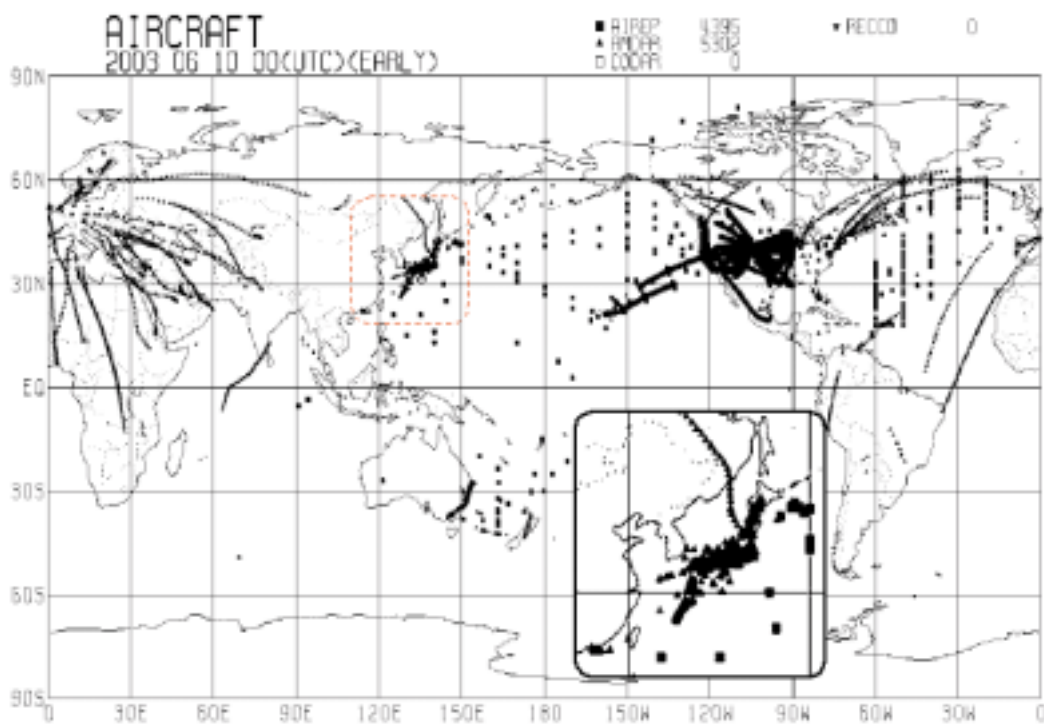
【質問】観測時刻は必ずしも00UTC、12UTCではないわけですが、±3時間から外れたデータはどのように活かすのでしょうか？

確か現在のところ4次元変分法は領域モデルで使

い、全球モデルでは使っていないようですが。

【回答】全球、領域の各モデルで行われる解析は、00、06、12、18UTCの各時刻について、それぞれ±3時間のデータを利用して行われます。ある解析時刻の±3時間から外れるデータは前後の解析時刻の解析に利用されることになるので、理論的には1日24時間、どの時刻の観測データも解析に用いられます。

しかしながら、数値予報では、解析時刻の3時間後までデータの入電を待ってられないものがあります。



※ 2003年6月10日00UTCのGSMで使われた航空機データの分布を示しています。

ACARSデータは▲AMDER(航空機自動観測データ)のうちに含まれます。

図1 AIRCRAFTデータ分布図

たとえば、全球モデルの00、12UTCの解析では、解析時刻の2.5時間後には解析計算を開始しなければ予報に間に合わないので、最後の30分の入電データは速報解析に使われません。そのため、解析時刻の

12.5時間後までに入電したデータを利用した解析（サイクル解析）を別途行い、より質の高い解析値を求めています（ただし、サイクル解析を初期値とする予報プロダクトはありません）。参考までに、各モデルの

観測データの入電締め切り時間(解析対象時刻からの時間)は次のとおりです。

- ・ 全球モデル
 - 00、12UTC
 - 2.5時間(速報)
 - 12.5時間(サイクル)
 - 06、18UTC 7.5時間

- ・ 領域モデル
 - 00、12UTC 3.0時間
 - 06、18UTC 8.5時間

4次元変分法については、これまでメソスケールモデル(MSM)だけに用いられていましたが、2003年6月19日00UTC初期値から領域モデルのデータ同化にも導入されました。全球モデルでは3次元変分法が用いられています。

* 今回、Q & Aの回答では数値予報課の方々にもご協力いただきました。

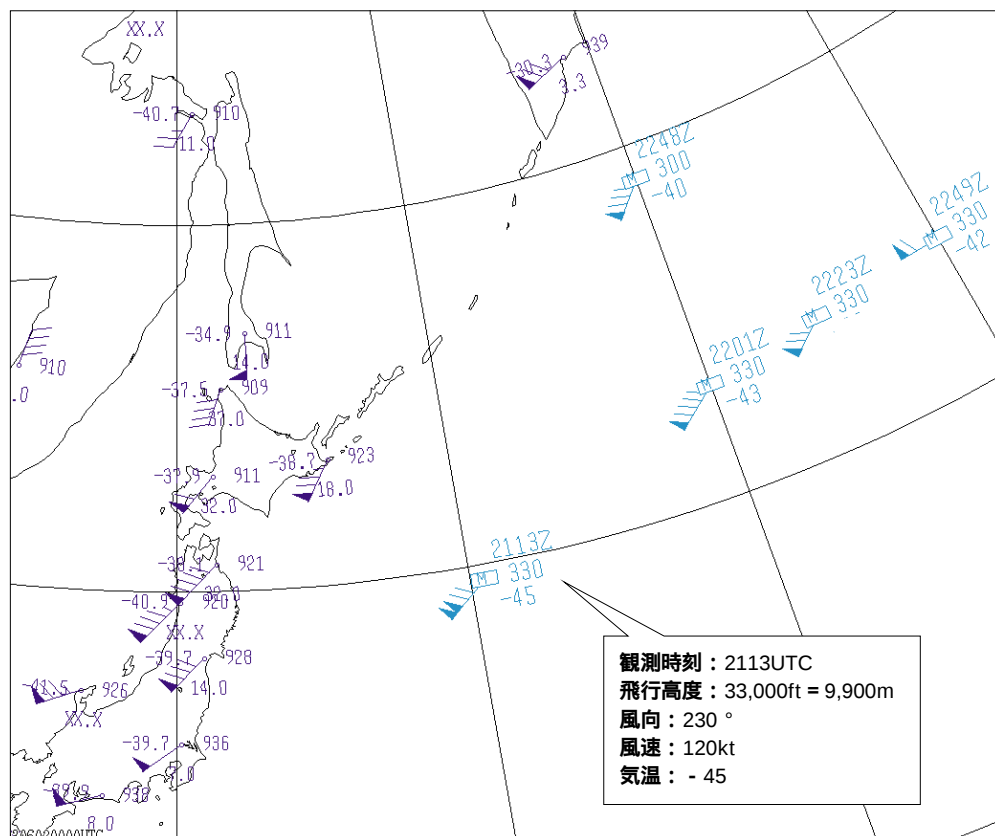


図2 300hPa高層実況図：2003年6月2日00UTC
飛行機の観測データは、高層観測時刻の前後3時間以内をプロット。

東京の気温上昇はヒートアイランド現象？

松本 学(千葉)

東京の気温について、東京都の一般環境大気測定局の気温データ(年度平均値の5年移動平均)の都心3区(千代田、中央、港)と多摩部にある測定局の温度差に注目して検証する。

1. 東京の都心と多摩部との温度差はどの程度か？

都心3区(千代田、中央、港)と多摩部との温度差は約1.3度ある。区部とは約0.4度、都平均とは0.8度の温度差がある。

2. 東京の都心と多摩部との温度差はひどくなっているのか？

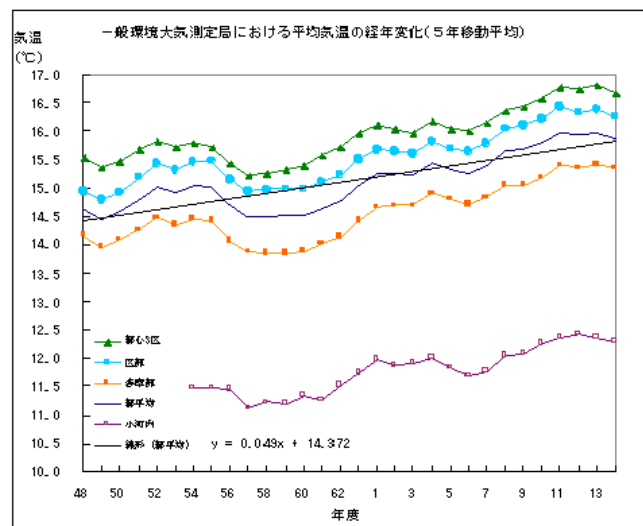
30年間の推移を見ると、上下はあってもほぼ同じ温度差で上昇推移しており、30年前と温度差は変わらない。つまり温度差がひどくなっているということはなく、東京全体の気温が上がっていることになる。

3. 温暖化の影響はあるのか？

30年間の都平均で約1.3度上昇しており、グラフも右肩上がりの傾向が顕著に見られる。このことは気象庁の小河内の気温データを見ても同様であり、温暖化の影響はあると考えるのが妥当である。このままの状態が続くと仮定すると、100年後には気温が4.9度上昇

することになる。

東京の都心と多摩部との温度差は、ここ30年間変化はないが、東京の気温は確実に上昇している。東京の気温が上昇しているのはヒートアイランドによるとするよりも、地球温暖化によるところが大きいと考えられる。



天気図を肴に君は酒が飲めるか？ ～月に一度、その日は熱くなる！～

佐々木恒（東京）

2003年6月21日（土）東京支部で天気図検討会を始めてから約5年半が経過し、節目となる50回目の開催を迎えた。今回初めて午前・午後を検討会を計画し、懇親会もセットにして“朝から夜まで天気図検討会”と銘打って開催したところ、検討会に50名、懇親会に38名の参加があった。

検討会には毎回首都圏以外の参加者もいるので、その方へ配慮して集合時間を10時半、ただし受付開始を9時半に設定した。午前中から始めて参加者が本当に集まるのかという主催者側の心配をよそに、受付開始前には数名が会議室前に集まっていた。10時を過ぎた頃には参加予定者の8割近くが受付を済ませ、おおよそメンバーの揃った作業グループでは、リーダーの指示の下で解析作業が始まっていた。

検討会は“その開催日を解析して、その翌日を予報する”を基本内容とし、その予報対象を全般概況や全国主要都市の予報、東京大手町の時系列局地予報などと毎回テーマを変えているが、最近では予報解説、つまりユーザーが求める予報を的確に予測して伝える技術のマスターもテーマに置いている。その中で今回は検討会の原点である“天気図解析”に重点を置き、いつもより長い作業時間でじっくり天気図解析に取り組むことにして、参加者がその解析経験に依じて7～8人のグループに分かれて解析作業をすることにした。

午前中は天気図解析、午後の前半は解析結果についてのグループ討議と発表資料の作成、午後の後半で全体討議を行った。この全体討議では、各グループでの

討議の中で話題とした内容、それについての見解・結論などを順に発表し、それに対する質疑応答の中で、予報する上での解析ポイントを参加者全員で確認する活発なものになった。

一方、懇親会は場所が少々狭く、残念ながら天気図を広げる光景は目にできなかったが、久しぶりに参加した顔も揃い、話の輪が広がっていた。また、恒例の自己紹介の後、講師を務める東修造さんに感謝の気持ちと今後の変わらぬご指導のお願いを込めて、感謝の言葉を刻み込んだカットグラス授与となったが、東さんの本当の喜びは、参加者の中からプロとして活躍できる気象予報士が一人でも多く誕生することにあることは想像に難くないだろう。

天気図検討会を首都圏とりわけ東京で開催するという“地の利”と“人の利”があったから50回も開催できたと考える向きも確かにあろうが、それだけで“月1回、年10回”の開催ペースは持続できない。気象予報士の資格を十分に生かす機会が無い中で、資格に見合う技能を身に付けたい、あるいは予報技術の習得・研鑽に励みたいという多くの仲間と、一人でも多くのプロの気象予報士を育てたいという熱血講師の結集こそが、この勉強会を継続できる原動力なのだろう。また、このような仲間の集まる勉強会だからこそ、懇親会でも講師を囲んで天気図が広げられ、それを肴に酒が酌み交わされ、熱い議論となるのだろう。

月に一度その日は熱くなる。さあ君は、天気図を肴に酒が飲めるだろうか？



地・方・活・動・日・程

地方活動日程はインターネットでも確認できます（i-mode対応） http://homepage3.nifty.com/rana_dog/yoho/

東京支部

- 募集内容
- 1. 実施日：9月14日（日） 13:00～17:00
 - ・実施場所：東京文化会館（上野）中会議室2
 - ・実施内容：天気図検討会
- 2. 実施日：10月4日（土） 13:00～17:00
 - ・実施場所：県立かながわ女性センター 第3会議室（神奈川県藤沢市江ノ島）
 - ・実施内容：波浪予想勉強会
主として波浪観測方法
- 3. 実施日：10月12日（日） 13:00～17:00
 - ・実施場所：東京文化会館（上野）大会議室
 - ・実施内容：天気図検討会
- 連絡先：佐々木恒
E-mail: BYM00263@nifty.ne.jp
FAX/TEL: 042-398-0251

埼玉支部

- 1. 実施日：9月27日（土） 13:30～19:00
- 2. 実施場所：さいたま市民会館うらわ（JR浦和駅西口徒歩10分）
- 3. 実施内容：記念講演 13:30～15:00
総会 15:00～16:45
懇親会 17:00～19:00
- 4. 連絡先：詳しくは埼玉支部ホームページ
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~o10kiya/>を
ご参照下さい。

関西気象予報士会 京都部会

- 募集内容
- 1. 実施日：9月6日（土）
- 2. 実施場所：キャンパスプラザ京都
- 3. 実施内容：第4回天気図解析勉強会（詳細未定）

鳥越一朗著

「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」

ケーブル

気象予報士会の会員の方は、本当にユニークな方がたくさんいらっしゃると思います。今回ご紹介させて頂く鳥越一朗さんもその一人です。

彼は現在、関西気象予報士会の幹事であり、その京都部会の世話人でもあります。私は以前より、彼の風貌はまさに平安時代の鳥帽子をかぶれば最も似合う人物ではないかと思っておりまして、たいへん京都っぽい男性であると申し上げておきましょう。

その彼は、仕事のかたわら 作家活動をされ、このたび三冊目の著書

光藤高明著

「日本の猛暑はどこから来るか」

著者は（財）日本気象協会関西本部で、本四架橋工事予測、関空工事予測、道路気象予測に長年携わってこられました。長年の予報現場における天気図の調査から、現代気象学に矛盾を感じ、非地衡風の重要な役割についてまとめたものです。現代気象学においては、自然の風は地衡風近似が保たれているという考えから、非地衡風の動向について、余り詳しく書かれたものがこれまで見あたりませんが、この本では、非地衡風の振る舞いが、かなり詳しく

「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」を出版されました。京都の歴史を題材にした、ファンタジックで少しロマンチックな少年少女小説で、関西気象予報士会で行っている「楽しいお天気講座」や室戸台風のシーンも出てきます。

ここで少しそのあらすじを――
京都の小学六年生香住涼太は、夏休みの自由研究で、廃墟と化した愛宕ケーブル跡を探索中、落盤事故に遭い昭和九年の世界にタイムスリップしてしまふ。愛宕ケーブルの運転士の家に預けられ、浩志という野生児や、早紀

という不思議な少女と友達になる。曾祖母の百を探し出すが、彼女は当時はやりの不良がかったモガで、女優を目指している。涼太は、百の恋人の友人から元の世界に戻る方法を教わる。そして、災害史上最大級の「室戸台風」が近づく中、愛宕ケーブル第六トンネルへ向かうが……

京都の名峰・愛宕山に昔ケーブルがあったなんて、この本を読んで初めて知りました。しかも、山上駅の遊園地には飛行塔まであったとは！

鳥越さんの作品は、一般的にあまり知られていない京都の史実を取り入れながら、異次元の世界に引き込まれるような、それでいて少年少女の心の

く検討されています。

本書には、ヘルムホルツの分解定理が間違っているなど、気象学の根本に関係する事柄が検討されています。私は、著者と関西本部において同じ職場であったため、何度か著者の説明を聞きましたが、正直、まだ理解できないところが多くあります。

ただ、これまでの気象学の中に矛盾があると指摘している本書の中身に同調できる部分もあります。

例えば、「流れの分解」についての節に示されたように、初めに渦のある

流れと無い流れに分けた場合、渦のある流れには速度ポテンシャルが存在しない事は分かります。

更に、速度ポテンシャルの無いその渦有り流れを、発散のある流れと無い流れに分けた場合、発散のある流れには、流線関数が無いことも分かります。

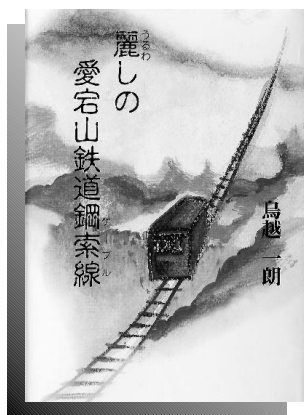
とすると、渦も発散もある流れには、速度ポテンシャルも流線関数も存在しないと著者の主張も、一理あるようにも思えます。

そのほか、ハードレー循環を含む大気大循環論や日本の猛暑の原因に対して著者独自の変わった考え方が示されており、従来の気象学に飽き足

動きをうまく描写もしながら展開していく、たいへんユニークな作品です。特に京都の歴史に興味をお持ちの方には楽しんで読んで頂けると幸いです。

この作品以外にも、「一千年の恋人たち」「平安京のメリークリスマス」(出版社はいずれもユニプラン)があります。

加藤文一(京都)

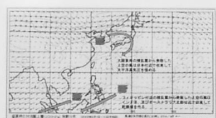


らない人には必見の図書としてご紹介いたします。

平松信昭(東京)

日本の猛暑はどこから来るか

非地衡風による気象学



光藤高明

いきなりの質問で申し訳ありませんが、あなたは日本の夏期に猛暑をもたらせる原因が何処にあるかご存じですか？

新風舎



「日本の猛暑はどこから来るか」

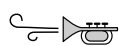
著者：光藤高明 発行：新風舎

定価：本体3,000円(税込) A 5 判、277ページ

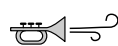
「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」

著者：鳥越一朗 発行：ユニプラン(Tel 075-251-0125)

定価：本体1,600円(税込) B 6 判、280ページ



幹事自己紹介コーナー



●石井和子会長

源氏物語の中の天気を調べたことがきっかけで、このところ「しぐれ」一般に興味を持ち始めています。私は物語の中の京都の時雨を陽性と陰性に分けたのですが、これには風が大きくな鍵をにぎっているようです。時雨についてどんなことでも良いので教えてください。



●久保田効副会長

まだ気象科学技術へ寄与したいという願いを持っています。気象予報士会は各地域の気象予報士会における内外への活動が基盤となっています。これらの活動を効率よくするため、インターネットのフル活用は重要だと思います。



●平松信昭幹事長（総務・会員担当）

今年は幹事長として、幹事会のまとめ役を仰せつかりました。今回の幹事の皆様はバイタリティーに豊かな方ばかりで、熱気に溢れています。その熱意を結集して気象予報士会の活動を盛り上げたいと考えております。



●岩田修幹事（情報システム・渉外担当）

足掛け20年IT業界におります。気象予報士会WebやMLは会員間の情報交換・相互理解のために必須のものです。微力ですが、気象予報士会の3～5年後の発展を見据えて最善を尽くします。



●小川豪幹事（地方・広報・情報システム担当）

幹事6年目の今期は地方を主で、広報と情報システムを副として担当させて頂くことになりました。この5年間、気象予報士会も変わり、私にも変化がありました。



●加藤順子幹事（会計・企画担当）

私が出金担当、出屋敷さんが入金担当という予報士会初のペア体制でいきます。普段は家計簿もつけられない程会計は苦手ですが、みんなの大切なお金。頑張ります。



●白石晶二幹事（渉外・企画担当）

「渉外」は今後の会の発展にとって重要な仕事ですので、慎重かつ大胆にやっていきます。地方の活動のお手伝いもします。また、気象予報士としての技術にみがきかけ「気象予報技術研究会」も担当します。



●高橋正己幹事（会員・総務担当）

新幹線の運行に関する仕事に携わってお



ります。地震や台風の日には会社に泊まることが多いです。3年ぶり2度目の幹事です。

●高橋祐介幹事（規則・企画担当）

この度、幹事会にご推薦頂き、規則・企画担当となりました。予報士歴も全幹事の中で一番浅いですが、会の発展のためにお役に立てればと思っています。



●出屋敷憲子幹事（会計・地方担当）

元気だけがトリエ（かもしれない?!）のデヤシキですが、皆さんと力を合わせて、今年の気象予報士会を盛り上げていきたいと思います。



●野尻英一幹事（企画・規則担当）

会員全員にとって素晴らしい気象予報士会であるように円滑なコミュニケーションを進めると共に、会全体として全員参加型の企画をと思っています。皆さんの力を合わせて一つでも具体的な成果を残したいと思います。



●堀江譲幹事（企画・広報担当）

陸上自衛隊に勤務をしており、航空気象観測が専門です。皆様にとっても価値のある気象予報士会を追及していきます。



●八木健太郎幹事（広報・企画担当）

30数年数年来、山で花見をすることが趣味の軟弱なハイカーです。本年度会報を担当することになりました。会報の充実のため皆様のご協力を仰ぐことになります。



●吉野仁治幹事（企画担当）

この3月、某省を定年退職しましたが、引続き同じ職場で農業気象のお手伝いをしています。この幹事会では、新たなプロジェクトの立ち上げで少しはお役に立ちたい。



●東修造会計監事

気象科学館等広報協力実行委員長、埼玉支部では代表世話人、東京支部天気図検討会では講師役と気象予報士会関係だけでも大忙しの日々です。しかし、日本酒さえあれば、その忙しさも忘れることができます。



●川端康夫会計監事

数年前ボランティアで始めたIT講習が、今大忙しになってしまいました。「気象予報士会」丸の行き先を、裏方からしっかりと見極めるようにしたいと思います。



編集後記

佐々木恒さんに寄稿していただいた「天気図検討会50回開催報告」私も常連メンバーの一人として感慨に耐えません。継続することの大事さを感じます。東修造さんにはこの場で御礼致します。晴れているにもかかわらず電車の雨樋からしたたり落ちる水。クーラーの結露水ですが、ちょっとした雨の時より多いように見えます。やっぱり湿度が高いのだなあ。報告書でも何でも、自ら世に問うたものに反応がないことは寂しいものです。ご批判を含めご意見、投稿を待っております。（八木）

気象予報士会 E-mail: yohohead@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/yoho/>

発行日 2003年8月 日 発行人 石井和子

発行所 気象予報士会◎ 編集協力 ㈱第一プランニングセンター